

# 就活に役立つ「ESG」 企業の成長力を予測



(株)日本総合研究所  
創発戦略センター スペシャリスト  
NPO法人 日本サステナブル  
投資フォーラム 運営委員  
青山学院大学 非常勤講師

黒田 一賢さん

Profile

2003年、青山学院大学経済学部卒業後、岡三証券、EIRIS (英ESG調査機関) にて、それぞれ財務面、非財務面での企業調査に従事。15年に株式会社日本総合研究所入社。創発戦略センターで、株式運用のための非財務面の企業評価業務などに従事。

就活生は非財務情報である「ESG」をどのように活用すれば良いのだろうか。(株)日本総合研究所で非財務の企業評価に携わり、大学でも教鞭をとる黒田一賢さんは、「ESGを重視する投資家と同様に、就活生もESGの目線で企業を評価することが重要」と話す。

世界のESG投資金額は年々拡大しており、その9割以上を欧米の投資家が占めています。ESG拡大のきっかけの1つと言われるのが、2008年に起きたリーマンショックです。

特にESGの「G(ガバナンス)」が問題視されました。目先の利益だけを求める金融機関や企業が倒産し、ひたすらに利益を追求する経営が見直されたのです。

「企業は事業を優先し、その事業で社会に負担をかけた場合は環境保全などに取り組めば良い」といった考え方も、今や通用しません。事業を起こす段階から社会や環境に対する影響を見通し、問題を起こさないようにリスクマネジメントをすることが重要です。さらには「企業は社会に役立つからこそ存続できる」という認識も広がってきました。

ESG目線で「生き残る」会社を選べ

日本でもESG投資は急速に拡大し、運用残高は2017年3月末時点で約

136兆円(NPO法人日本サステナブル投資フォーラム調べ)に達しています。企業は、その資金を呼び込むためには環境や社会課題への取り組みを強めなければなりません。

実際に企業経営者の間でも、ESGに対する意識は高まりました。例えば売上高に加えて非財務情報を載せた「統合報告書」で社会課題への取り組みをまとめたり、ダイバーシティ(人材の多様性)など非財務情報の目標や現状を開示したりする動きが活発化しました。ESGを重視する投資家の旺盛な需要を背景に、企業も積極的に情報公開するようになってきました。

就活生も、ESGを重視する投資家と同様に、ESGの目線で企業を評価することが重要です。日本の産業において「花形」と呼ばれる産業は、時代の変化につれ変わってきました。日本中の誰もが知るような有名企業でも、現在高い市場シェアを持っていたとしても、これから先も成長し続けるかどうか、その保証はありま



せん。

しかし、経営計画にESGを取り入れている会社ならば、社会課題をビジネスに結び付ける感性に優れ、様々な面で生き残る可能性が高いといえるでしょう。

逆にESGを意識していない会社は、例えるなら古いレーダーで航海する「沈みやすい船」にあたるかもしれません。

就職とは、自らの人的資本を企業に投資し、対価を得ることです。自分の身をどこに委ねるか。その決断は、おそらく投資家よりも重たいでしょう。

データだけでなく会って確認

情報開示に積極的な企業が増えたとはいえ、ESG情報は基本的に企業の裁量で開示されます。多くの場合、そのデータは監査など第三者によるチェックを受けているわけでもありません。

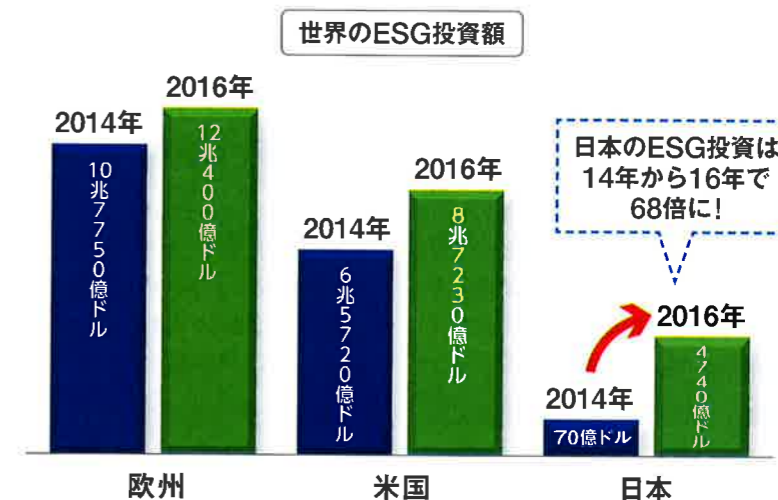
まずは、企業のデータを確認・比

較したうえで、そこで働く社員にコンタクトしてみるのが良いでしょう。例えば、女性活用に積極的な企業に関心があるなら、キャリアを積んだ女性社員に職場の話聞くべきです。ガバナンス強化のための取り組みは、情報公開の中に「具体的な仕組み」がきちんと明記されているかどうか、企業の本気度を測るバロメーターとなります。

製品・サービスなど自社の本業を

通じて社会課題の解決を図ろうとする企業を重視すると良いでしょう。

本業以外の社員たちのボランティア活動などをSDGsにひも付けてアピールする企業も見受けられますが、社会課題の解決をビジネスチャンスと捉え、解決に向けた製品・サービスを戦略的に展開する企業のほうが本質的にESGに取り組んでいて、長期的な成長にも寄与していくと見ています。



参照: GSIA 2016 Global Sustainable Investment Review